

沖縄本島の孤児院前史としてのサイパン孤児院の教訓

—沖縄戦以前の戦闘経過と占領政策の実験—

Okinawa Island orphanages and lessons from Saipan

– Experiments in occupation policy

and the fighting period before the Battle of Okinawa

浅井 春夫

ASAI Haruo

要約

沖縄戦の後、沖縄本島では占領政策の一環として孤児院が開設されたが、その前史としてサイパンでの2年間、孤児院が開設され、多くの教訓を示していた。ススベ収容所内にあった新旧の孤児院の運営は、奇跡的な改善を示していた。とくに新孤児院の院長であった松本忠徳氏の果たした役割が大きい。こうしたサイパンでの運営上、実践上の改善があったことを、その後の沖縄本島での孤児院政策に活かしたとは言えなかった。その点では沖縄の占領政策は一貫して支配者の姿勢であった。

Abstract

Following the Battle of Okinawa, orphanages were founded on the main Island according to occupation policy. However, they had already been in operation two years previously in Saipan, and there is much to learn from those institutions. Records of the time show miraculous improvement in the management of both the established and newly created orphanages at the Susupe Concentration Camp in Saipan. Especially important was the role of Mr. Tyutoku Matsumoto, the director of the newly established orphanages. However, management practices that led to practical improvement in conditions in Saipan did not necessarily carry over to orphanage policy on the main island of Okinawa after the war due to policies of the Allied forces.

Key words: Saipan orphanages, Concentration camps, Susupe Concentration Camp, Tyutoku Matsumoto

はじめに—本島以外の孤児院の位置づけと被害の特徴—

沖縄戦後の孤児院を研究する上で、それ以前の本島以外の島々でのとりくみについて戦闘の経過に関わっての孤児院運営の独自の位置づけと特徴をもって語らなくてはならない。言うまでもないことだが、沖縄における戦後の孤児院は沖縄戦をかいくぐってきた住民・孤児たちの再出発・復興のとりくみという側面とともに米軍占領政策に組み込まれた側面を色濃く持っていた。

そもそも戦前の沖縄の歴史においては、孤児院および養老院は存在しなかった。近代沖縄の民間社会事業の児童福祉領域でみると、少年感化事業、「私立沖縄訓盲院」などは存在していたが、孤児院は設立されてはいなかった。岡山孤児院の沖縄公演旅行が1909（明治42）年2月6日～3月中旬におこなわれ、相当な入場料と寄付金を集めていた。岡山孤児院の沖縄公演の影響は「沖縄の人びとの民間慈善事業に対する理解を深め、寄付をする習慣を身に付けさせたということかもしれない」[末吉（2004），pp.181-185]と評価される面を持っている。そうした影響があったにもかかわらず戦前の沖縄においては孤児院が建設されることはなかった。それは“ゆいまーる”といわれる相互扶助的村落共同体で孤児などが“吸収”されてきた側面が大きい。

したがって戦前の沖縄で孤児院が存在することがなかった社会的歴史的背景として、村落共同体での相互扶助（親族による相互扶助、「郷友会活動の骨格」）、[石原（1986），p.14]による生活支援活動が機能していたことがあったといえよう。

また沖縄の孤児院をめぐる米軍による施策は、本島を中心に対策が取られたが、離島に関してはほとんど関心を持たれることはなかった。

沖縄本島ではすでに1945年4月から6月の段階で、4月1日の米軍上陸の日には米軍による住民の収容所での人数は21人であったが、6月30日時点では28万人超、7月30日には32万人に膨れ上がっている [上原（1986），p.407]。45年8月前後の沖縄本島及び群島の人口は33万4,429人であったので [仲宗根（1986），p.122]、6月時点でみれば非収容者は約5万人であり、ほとんどの住民が収容所で管理されていたことになる。同年5月末の民間人の居住が許された地域は、本島の約10%に限定されていたという状況にあった [鳥山（2013），p.13]。

沖縄本島における収容所は20あまりが開設されており、辺土名、田井等、桃原（国頭村）、久志、瀬嵩、銀原、大浦崎、二見、大川、三原、嘉陽、漢那、宜野座、福山、古知屋、古謝（コザ）、知念、平安座等が収容所の所在地であり [仲地（2001），pp.88-89]、その収容所のなかに孤児院が開設（下線を引いた収容所に開設）されていた。

『戦後沖縄児童福祉史』（1998，p.4）によれば、孤児院と養老院の数を11カ所としており、「辺土名、田井等、瀬嵩、福山、惣慶、漢那、石川、前原、胡差、糸満、百名＝うち惣慶は養老院のみ」があげられ、1,000名の孤児が収容されていたと記述されている。

沖縄戦後の当初は米軍の指導・管轄のもとに孤児院・養老院は置かれたが、1946年4月からは沖縄諮詢会を経て沖縄民政府に移管されている。なぜ戦後直後においては孤児院等の管轄が米軍の指揮下に置かれたのかについての理由は定かではない。沖縄住民には身寄りのない孤児・孤

老の世話をできる余裕がなかった状況では、米軍が直接管理せざるを得なかったという面があった。

沖縄における戦後の行政は、「奄美大島、沖縄群島、宮古群島および八重山群島における知事および民政議員の選挙を行うべし」(軍政長官「琉球列島住民に告ぐ」1950年7月3日)という宣言文が出されたように、本島を中心とした沖縄群島と宮古群島、八重山群島は別個の行政区という状態であった。したがって沖縄群島以外の石垣島、宮古島に関しては、それぞれの群島行政が独自に社会事業への取り組みが展開されていた。

それ以前の歴史的な段階としてサイパン島での孤児院開設が米軍占領のなかで実施されていた。その内容は艦砲射撃(軍艦からの砲撃のことで、沖縄戦では米軍の艦砲射撃が繰り返され、多くの戦死者を出した)や激烈な地上戦、「強制集団死」などで親が死に取り残された子どもたち=戦災孤児問題への対応が求められたことによる。言うまでもないことであるが、戦災孤児問題への対応はあくまでも占領政策の一環であったことは戦後沖縄の孤児院の状況をみても明らかである[浅井(2013)紀要]。

本稿では戦後の沖縄本島における孤児院運営の前史であり、いわば実験場でもあったサイパン孤児院の開設から閉鎖までの実際をできるだけ史料を拾い起し、新たに発掘した史料やインタビューなどで補足しながら分析することとする。

サイパンにおいては米軍占領のもとで孤児院がススペ収容所内で設立され、新旧のふたつの孤児院が運営され、旧孤児院の後半期から、とくに新築された孤児院では大きな運営上実践上の改善があったことを分析する。

当初の構想では、1本の論稿でサイパン島、石垣島、宮古島の3つの島での孤児院をめぐる動きに関して、歴史の事実として本島だけでなく、群島のなかで孤児院設立と運営に関して地元住民と行政の努力があったことを整理する予定であった。しかしサイパン孤児院の史料の発掘と聴き取り調査などで新たな事実を確認するなかで、単独の論稿としてまとめることにした。

その理由の第1として、米軍が沖縄本島の孤児院政策を形成するうえで、サイパンの孤児院は結果的に実験場としての意味を色濃く持っていたことがある。新・旧孤児院の実態の変化を通して、当時の運営が孤児たちの生命と生活をどのように左右してきたのかを考察することができる。米軍はサイパンにおける孤児院改革の実際を踏まえて、沖縄占領期における孤児院運営のあり方に活かすことができたはずだが、そうはならなかった。

第2に、孤児院改革の実際=処遇水準の向上はどのような内容であったのかについて具体的に考察することが可能であることがあげられる。施設環境と運営システムに関しても史的にある程度確認できることも重要である。

第3として、とりわけ孤児院の運営責任者である院長の見識が大きな意味を持っていたことを考察できる点である。まさに孤児院の運営改善は“奇跡”ともいえる状況であった。その“奇跡”は米軍占領のもとでの収容所内の孤児院であったが、米軍のキャンプ(収容所)司令官と孤児院管理者、松本忠徳院長(旧孤児院では副院長格で従事)、職員スタッフの人的な組み合わせが偶

然に生みだした歴史の局面であった。しかしその成果と教訓を沖縄本島の孤児院政策と実際の運営で活かした形跡は見られない。その点でいえば、米軍の占領軍としての本質は歴史的に出発点から現在まで一貫して不変であることを指摘しておきたい。

新たな史実の発見もあり、貴重な事実を検証することもできた。すでにサイパン孤児院の跡形はまったくないのだが、その所在地跡を現在のアメリカ自治領・サイパンで確認することもできた。歴史のなかで埋もれさせてはならない事実があることをあらためて実感した。

歴史の空白を埋める課題が沖縄の歴史ではまだ多く残されており、自らの課題として、沖縄戦後の孤児院研究を深めていきたいと決意している。

1. サイパンでの孤児院設立の戦時的背景

1943年から1944年前半にかけて連合国軍はソロモン諸島などのパプア半島を攻略し、マリアナ諸島（最南端のグアム島を含め、サイパン島、テナン島、ロタ島など主要な島は15ある）にまで迫ってきた。米軍は1944年6月19日のマリアナ沖海戦で日本海軍を撃破し、サイパン島、マリアナ諸島を占領したのであった。アッツ島玉砕の1年後であった。マリアナ諸島がアメリカの攻撃戦略目標とされたのは、大型爆撃機であるB29が完成したことで東京を射程に入れた日本本土が攻撃範囲に入ることによる。

当時のサイパン島は、南洋諸島における出稼ぎ移住者のもっとも多いところで、1922年には約2,000人の沖縄県人が渡航し、31年には1万人を超え、37年には2万5,772人に達し、在サイパン邦人を沖縄県人が占め、開墾・農業に従事していた〔『沖縄大百科事典（中巻）』（1983），pp.182-183〕。

サイパン島には戦前から多くの日本人が住んでおり、戦況の悪化にともなって5千人の移住を行ったが、米軍（海兵師団）が上陸した際にも約2万人が島に残っていた。島にこれほどの人が残留したのは、サイパン、テナン、グアムからの引揚船が撃沈されたことで、残ったほうが得策と判断をしたことがあった〔近現代史編纂会編（2011），p.78〕。

本土が連合国軍の空襲圏内に入ることになれば、日本の敗北は必至となる。その点でサイパン島、マリアナ諸島は重要な拠点であり激戦地となったのである（図1地図を参照のこと）。「マリアナは日本本土防衛の防波堤ともいべき要衝にあるため、日本海軍は決戦兵力として第一航空艦隊を配置」しており、サイパン島の陸軍部隊の総兵力は、約2万7,500名を数えていた〔陸戦史研究普及会編（1968），pp.20-22〕。しかしマリアナでの戦闘は悲惨極まるもので、短期間での玉砕という結果となっている。その経過は以下のとおりである。

1944年6月15日、総勢約7万人の米軍はサイパン島に上陸を開始し、7月7日には日本守備軍を殲滅、サイパンは陥落した。

1944年6月15日 米軍サイパン島上陸

同年7月6日 サイパン島日本軍守備隊、大本営へサイパン島奪還が不可能との上奏文を打電。

7月7日 サイパン島陥落。日本軍守備隊約3万人殲滅

7月7日 米軍グアム島に上陸

7月24日 米軍テナン島に上陸

8月2日 テナン島陥落。日本軍守備隊8,000人殲滅。

8月11日 グアム島陥落。日本軍殲滅

サイパン島では、日本の民間人約2万人のうち、約1万2,000人が米軍によって収容され、生き残った。また軍人1,000人、朝鮮人（飛行場建設などの労働者）捕虜1,300人も出ており、彼らは別々に収容され、軍人はアメリカ本土やカナダの収容所に送られた。日本軍は2万3,811人が戦死し、921人が捕虜となった。

サイパン戦で死亡した日本人（軍人と民間人の総計）は、3万3,000人で、生き残って捕虜となったのは約1万7,000人である。つまり、サイパン島攻防戦での「軍民全員玉砕」は、事実ではなく、捕虜を出さないことになっている日本軍の“名誉”を守る建前の「玉砕」宣伝であった。ただサイパンにおける日本軍兵士の生存率は3.7%（死亡率96.3%）となっており、殲滅（皆殺しにしてほろぼすこと）状態であったことに変わりはない（鳥飼行博研究室 Torikai Lab Network 「サイパン・テナン島の玉砕戦」 <http://www.geocities.jp/torikai007/war/1944/saipan.html>）。



地図) <http://saipan.jfk7.com/basis/index.htm>

図1 サイパン島の位置

圧倒的な軍事力の差によって、日本軍は次々と玉砕・殲滅されていった。マリアナ諸島は、太平洋の防波堤として不落と信じられていたが、陥落という事態によって米軍が日本軍の国防要

線内の諸海域を自由に行動することが可能となった。「マリアナを基地とする米軍に本土爆撃が可能となったばかりでなく、本土に対する直接の侵攻までも考慮しなければならない情勢となった」[陸戦史研究普及会編(1968), p.22]のである。マリアナ諸島の攻略後、サイパン島とテナアン島を制圧し、本土にB 29爆撃機が出撃する基地を建設した。テナアン島は広島、長崎への原爆投下の搭載機の発進基地となったことは有名である。

サイパン陥落間もない1944年7月下旬に、大本営は南西諸島、台湾、フィリピンなどに決戦準備を命令した。それにともない大本営陸軍部は「島嶼守備要領」を発表した。サイパンやグアムなどで実行した玉砕戦法をやめ、地の利を活かした遊激戦(ゲリラ戦法)で敵側にも出血を強いる作戦に変更をしたのである[石原(1989), p.194]。

その作戦の具体的な内容として「島嶼守備ニ任スル部隊ハ熾烈ナル敵ノ砲爆撃ニ抗堪シツツ長期持久ニ適スル如ク陣地ヲ編成、設備シ敵ノ攻撃ヲ破摧」[防衛庁防衛研修所戦史室編(1986), p.86]することが指示されている。沖縄における日本軍の使命は、本土防衛のための長期持久作戦を遂行することであった。端的に言えば、「日本本土に対するアメリカ軍の攻撃を緩和すれば事足れる位相しかなかった」[玉木(2011), p.116]のである。

沖縄においては1944年10月10日のいわゆる「10・10空襲」によって那覇市内は壊滅状態となる。南洋諸島での戦闘で太平洋戦争の戦況はほぼ決していたと判断できるはずであったが、大本営・日本軍司令部は沖縄を“本土防衛のための捨て石”とし、敗戦後の国体護持のための交渉のできるための持久戦へと戦略を立てていくのである。こうして多くの犠牲を生み出した戦争の結果、沖縄本島のなかで多くの孤児たちが生み出されることになる。

戦時中と戦後に、サイパン島には孤児の数は400人いたが、そのうちの320人は里親に引き取られていった。当時の残された孤児は80人である[沖縄県文化振興会公文書管理部資料編纂室編(2004), p.67]。

こうして引き取られることのなかった子どもたちは、孤児院で暮らすことになる。

2. ススペ孤児院からサイパン孤児院への変遷

1) ススペキャンプの状況

『米海兵隊公刊戦史』によれば、1944年8月下旬までにススペのキャンプに収容された民間人は、日本人1万424人、チャモロ人2,350人、朝鮮人1,300人、カナカ人875人の合計1万4,949人となっている。人口動態にも精通していた斎藤貞三によれば、朝鮮人を含む日本の民間人は2万4千人近く、日本人と朝鮮人の死者数は1万2千人を超え、人口の半数が戦争の犠牲になっている。「民間人の死亡率だけを見れば、サイパンは地上戦の行なわれた戦場として、のちの沖縄戦をも上回る太平洋戦争史上最悪の舞台と化した」[野村(2005), pp.307-308]のである。

ガラパン町(サイパンの町)の副総代であり、サイパンの沖縄県人会会長であり、サイパン孤児院の院長であった松本忠徳著『自叙傳』(手書きの自叙伝で、沖縄県浦添市在住の長男・忠司氏が所持。「1955年5月脱稿」と表紙に記載されている)によれば、キャンプに収容された県人

は次の通りであった（戦争で生き残ったもの）。1945年4月当時に集約したものと思われるサイパンの日本住民の数字は以下の通りである。

（他府県人は千人位であった。）

那覇市	218人
首里市	83人
島尻郡	2,798人
中頭郡	5,367人
国頭郡	2,606人
八重山郡	134人
宮古郡	21人
計	11,227人
孤児	98人（下線は浅井）
出生	49人
合計	11,374人

1944年7月上旬に組織的戦闘が終わったサイパンでは、南洋興発の製糖工場の裏にススベ（ススベと表記されることもある）収容所が造られ、約2万人が収容された。「ススベ収容所」という名称は、具志川市（現・うるま市）史編さん室が嶋峯一氏より借用した収容所内の孤児院の資料の中に米軍の印刷物があり、それに「CAMP SUSUPE」と書かれていることから、サイパンの日本人キャンプを「ススベ収容所」と仮に名付けて使用されてきた〔井波（2000）、pp39-40〕。

14歳のとき（1944年後半～46年1月の期間）にススベ収容所で生活した佐藤多津によれば、それぞれが生活した幕舎は、「横幅が三十メートル、奥行き十五メートル、高さが二メートル三十センチくらいで、トタン屋根、板張りの床に壁のないバラック」であった。「だいたい百人程度の人が住んで」おり、「こんな幕舎が十棟で一団体をなし、日本人の抑留所には十三団体、約一万三千人の抑留者」がいたことを記述している。また「抑留所では働いていない者は一日二食しか食事」がなかったということである〔佐藤（1996）、p.126〕。

2) 初期のススベ孤児院（旧・孤児院）の悲惨な状況

本稿では旧孤児院を「ススベ孤児院」、新孤児院は「サイパン孤児院」という表記で統一しておく。

初期のススベ収容所に民間人は捕虜になって収容されたが、栄養失調で死んでいく人が多かった。とくに低年齢の子どもたちが犠牲になっていた。

米軍上陸直後の1944年6月に、ススベ収容所内にススベ孤児院が開設された。同年7月に撮影

されたススベ孤児院の写真があるが、非衛生的な部屋のなかが写されている。多くの子どもたちがここでは亡くなっているのだが、死亡記録の実数は把握されていない。



出所) 沖縄県文化振興会公文書管理部資料編纂室編『沖縄県史 資料編18 キャンプススベ (和訳編) 現代3 サイパンにおける軍政府の作戦の写真記録』沖縄県教育委員会、2004年、66頁下の写真 (1944年7月撮影)

写真1 開設当時 (1944年7月) のススベ孤児院内部の様子

写真1 (1944年7月撮影) のキャプションには「戦争によって孤児達が増加する。激しい戦争によって子供達は親を失い、取り残され、栄養失調になる。ススベ孤児院のほとんどの子供達は体力が衰えており、病気を患っている子もいるが、時折負傷している子供も見かける」[沖縄県文化振興会公文書管理部資料編纂室編 (2004), p.66] と記述されている。

収容所内に孤児院が設立されたときの状況について、「朝早くから全員を裸にして冷水でジャージャーと浴びせているのを見たので、微熱のある子をそこに入れたら2~3日で死んでしまおうと思った」[高宮城トヨ (1993) 「サイパン島で身内との生き別れ」『上勢頭誌 中巻 通史編 (II)』 p.539] と、開設当時の孤児院の悲惨な状況が語られている。

そうした状況は病院から孤児院に移動する子どもにおいても複雑な気持ちであったであろう。「多くの少年は、怪我が治り退院することができても収容所から迎えに来る親達は見あたらなかった。ほとんどの者が収容所内の孤児院に送られて行くのである。なれた病院生活から離れ難く、出て行くのを嫌がる子供も多かった」[宮城 (2002), p.101] と記憶されている。

一方、収容所では「孤児差別」も少なくなかった。「同じ収容所にいながら親無し子は大人たちに邪魔者扱いにされ放り出された。寝るところがない。キャンプは高床式なので、縁の下にはいり砂地に上着を脱いで敷き妹と二人体を寄せ合って寝た」り、配給物も「焦げたところをかき

集めるようにしたご飯で冷たい差別をうけ」たことも少なくなかったのである [佐々木 (2001), p.78]。

サイパンでの孤児院も含めて戦後沖縄の孤児院の在籍名簿、死亡記録などは現在のところ、米軍管理下に置いて、沖縄諮詢会、沖縄民政府においても残されていない。これまでまったく個々の孤児院の記録は公にされていない。

しかし『米国陸海軍 軍政/民事マニュアル』(1943年12月22日)において「民事担当官の職務」として「**W 公的福祉** 児童、貧困者、障害者、および老人の世話をするための公的および私的施設の監督、およびそのような施設を運営するために必要な現地組織の助長」が掲げられ、「**X 記録** 以上に述べた軍政府の行政分野およびそれ以外の分野で軍司令官が自ら行なったか、もしくはその権限の下で行われたすべての事柄について完璧な記録を保存することは、彼が正確な資料を提出することを可能にする。このような記録は、平和会議、損害賠償請求処理委員会、調査機関、および史料目的などに欠くことのできないものである」[『米国陸海軍 軍政/民事マニュアル』(1998), p.21]と明記されている。こうしたマニュアルの趣旨からみても記録が取られてなかったということはいえない。

初期のススペ収容所は、**図2：初期のススペ収容所**(15頁)にみるように、大池(ススペ湖)側に孤児院、男だけのキャンプ、島民のハンセン病患者の施設、海岸側には島民キャンプ、民政政府、独身幕舎、1団体、朝鮮人キャンプがあった。男だけのキャンプは70人、80人の集団であり、有刺鉄線は特有の機能を持っている [石弘之・石紀美子 (2013), p.276]。サイパンや沖縄本島での鉄条網で囲まれた収容所生活は被支配者としての出発点であり、その心理的訓育の意味があったのである。鉄条網で囲んでいるだけで、テントも床もなく、地べたでの生活であった [佐々木 (2001), p.41]。そういう実態が初期の収容所にあったことを考えると、孤児院もそれに近い状況にあったと考えることができよう。

旧孤児院はキャンプの隅に掘っ立て小屋のように建てられていた。食べ物に不自由しており、水のようなお粥であった。多くの子どもたちが死んでいった。古い孤児院の頃には、すぐ前に死人小屋があり、物置のような小屋になくなった人や子どもたちを一時的に収容していた。人数がまとまった頃に連絡をして、トラックに乗せて運んだということである [佐々木 (2001), p.79]。

そうした現実には孤児院だけでなく、収容所全体の生活実態でもあった。

「楽園地と呼ばれ、慕われていた南洋の孤島サイパン」に1943年に渡った知念春江(当時、28歳)は、「住民は難民収容所に保護されても、殆ど腹をこわしてバタバタと死んでいった。病院でも手のほどこしようがなく、収容所内に死体処理班まででき、穴を掘って待つ状態であった。ひとつの穴に15名くらいぼんぼん放り込み、その上に土をかけるだけのことだった。全く哀れな悲しいことであった」[知念春江「玉砕の島サイパンで」座間味村史編集委員会編(1989), p.195]とのことである。「一緒にいる女の子の家族も全滅だと知らされた。でもあきらめきれず、死人が運びこまれるたびに確かめにいった。女の子は、後で孤児院に移された」(前掲, p.196)と記述されている。

孤児院だけではなく、収容所の生活実態がこうした現状にあったことは確認できる。この状態は、「俘虜は人道をもって取り扱うこと」（第4条）という基本を明記したハーグ陸戦条約の規定に違反する可能性がきわめて高いといわざるを得ない。1899年にオランダ・ハーグで開かれた第1回万国平和会議において採択された「陸戦ノ法規慣例ニ関スル条約（英: Convention respecting the Laws and Customs of War on Land）」並びに同附属書「陸戦ノ法規慣例ニ関スル規則」。日本は1911年11月6日に批准）第7条「政府はその権内にある俘虜（戦争で敵方にいけどりにされた者。捕虜のこと—浅井）を給養すべき義務を有する。交戦者間に特別な協定がない限り、俘虜は糧食、寝具及び被服に関し、これを捕らえた政府の軍隊と対等の取り扱いを受けること」という規定に違反するといえよう。

1945年4月当時の孤児の数は98人で、サイパン引き上げの1946年1月28日の直前での記述では収容児童数は133名と報告されたり、137名と記述されたりと若干の変動はあるが〔佐々木(2001), pp.80-81, p.90〕、スベ孤児院開設当初の人数（80名）よりも増加している。

また新孤児院の前で全員が写っている写真の人数を確認すると、子どもの数は99名となっている。こうした収容児童数の変動が何によっているのかは史料的には定かではないが、収容所の人数が膨らむのに連動して、孤児の数も増加していったといえることができる。

旧孤児院の開設当初（1944（昭和19）年7月5日に米海軍が創設）は、孤児たちの状況は悲惨をきわめていたが、松本忠徳氏が副院長格で従事するようになって確実に変化をしていくのである。

サイパン孤児院（新孤児院）が開設され移転したのは、1945年6月6日であるから、「マリヤナ時報」（1945年4月27日付）写真2で紹介されている記事は、旧孤児院のスベ孤児院の最後の時期である。

スベ孤児院の状況を「マリヤナ時報」（1945年4月27日）は次のように伝えている。

「ゴース中佐を院長に、副院長に松本忠篤氏（忠徳の誤記—浅井）、衛生兵1名、保母10名、庶務2名、炊事婦3名により一切の面倒を見ている。朝の4時半に起床、午前6時までに保母の指導により洗面一切を終わり、6時から国民学校訓導の出張を求めて体操、遊技、学科等を教え、11時に昼食、午後は約1時間体操遊技、1時半にはおやつ、2時半学園を出発、3時帰院、温浴後4時夕食、4時から6時までは自由の時間として、保母を相手に楽しく遊ぶ、7時就床、日曜日、水曜日は午後海水浴に行くという日課になっている。現在収容人員は80名であるが、目下診療所付近に新築中の建物が落成の上は125名を収容する予定である」ことが紹介されている。

松本副院長は、「信条」=処遇方針として「(1) 神から授けられたる聖なる業、(2) 愛せよ、信ぜよ、親和せよ、(3) 常に児童と共に（あることを忘れるな—忠徳氏手書きで補足）、(4) 保母は努めて（児童の一忠徳氏手書きで補足）個性を知るべし」をあげている。

旧孤児院での処遇方針（開設後10カ月）であるが、この方針を実践的には新孤児院で引き継いでいったことはまちがいない。



史料提供) 松本忠徳氏の長男・忠司氏所蔵

写真2 「マリヤナ時報」1945年4月27日「孤児院の参観記」

3. サイパン孤児院の新設とその運営

1) 米軍管理者から松本忠徳院長に交代

1945年4月のスベ孤児院の状況は、一変して子どもたちの状況は健康的である。

初期のスベ孤児院の状況は、この時期には大きく改善されていたことを写真の状況から見て取れる。とくに食糧事情は大いに改善された。孤児院の子どもたちは団体で行進をして農場へ出かけて行き、農作業に従事した。こうした食糧確保の取り組みもあり、子どもたちの健康は改善されていったのである (写真3)。

また教育面においては孤児院の中にも学校があり、6学年までで複式学級を行っていたといわれる。孤児院以外の収容所内では、1946年の時点で、8学年まであり、全部で53クラス、それぞれにクラス担任教師が配置されていた。さらに収容所以外の第1～3農場にも8学年までで複式学級であった [伊波 (2000), p.44]。



出所) [沖縄県文化振興会公文書管理部資料編纂室編 (2004), p.67]

写真3 健康を取り戻した孤児院の子どもたち (ススペ孤児院の後期)

ススペ孤児院での運営の改善を踏まえて、サイパン孤児院が新設されるのである。図2にみるように、軍病院、診療所の近くに建てられている。ススペ湖近くにあった旧孤児院よりは地理的な環境においても改善がなされたといえよう。



『具志川市史だより』第15号 具志川市教育委員会 2000年より作成

資料出所) [沖縄県文化振興会公文書管理部資料編纂室編 (2004), p.66]

図2 ススベ収容所見取り図と新孤児院の位置

旧孤児院であるススベ孤児院の初期段階での悲惨な状況は、松本忠徳が副院長格で入職することで運営状況は大きく改善された。さらに院長となった新設の孤児院＝サイパン孤児院で処遇水準は向上したのである。

当時のサイパン島のススベ収容所内の状況について、キャンプ内は班長もいて、人数分の食事が配給されていたが、「孤児に対して、キャンプ内の大人たちはまず雨が降ろうが、夜になろうが、建物の中に入れてくれないのです。それで僕は雨に濡れて木の下で寝て、暮らしていました。……僕のような孤児はまだたくさんいたので、孤児たちは残飯を捨てるのを待ち受けていて、それを拾って食べて飢えをしのいでいた」り、「キャンプ内で死んだひとの墓場をねぐらにする」[沢岬安英「住民の『集団自決』の生き残り」(1993)『上勢頭誌 中巻 通史編(Ⅱ)』p.554]など、孤児たちの悲惨な実状を松本忠徳氏も見ていたであろう。「孤児院にも関心があった」と、以下のように自叙伝に書いていることからわかつた。

松本忠徳著『自叙傳』の「第4章 南洋時代(三十八才から五十三才まで)」の「二〇、孤児院経営」の項では、「キャンプに収容されて私は労務を免かれていたので、毎日キャンプ内をブラブラしていたが、司令部から呼出されて思想テストされたり、ジープに乗せられて戦跡や飛行場を見せられて、いろいろな事を質問された。案内者はケラー大尉であったが、彼は父が牧師で父

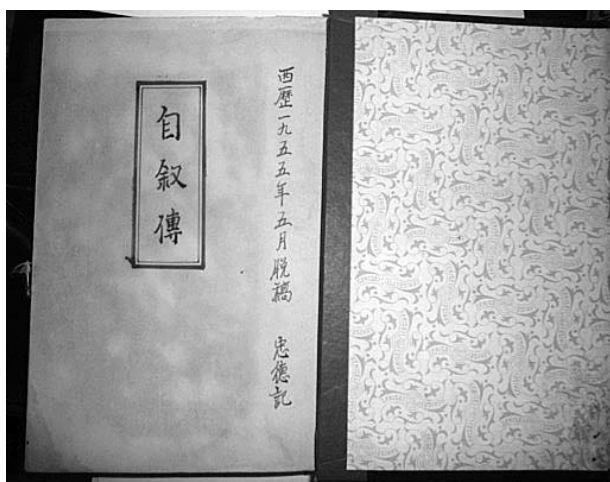
と共に十年も東京にいたので、日本語は何でも話していた。毎日キャンプでブラブラしているとき、孤児院に来て働いてくれないかとの交渉を受けた。岸上信夫二世が熱心に話すので（岸上二世は孤児院に深い関心を持ち、寄附金などもしていた）、私も孤児院には関心もあったので次の条件で入った。「保母及傭人の任免権を興えること。孤児院を新築すること」。この孤児院は昭和十九年七月五日に米海軍が創設したもので、院長は海軍々医中佐クラーク・ガースで、衛生兵が一人、保母傭人は日本人であった。院長は非常にやさしい人で孤児を可愛がっていた。私が入ってから院長は時々来て私にまかしていたが、要求する設備等もすぐやってくれた。孤児院の新築についてはグワム島の総司令部まで行かれて折衝し出来るようになったと自分でも喜んでいて、昭和二十年六月、病院に隣接して敷地千余坪に諸設備充実した立派な孤児院（写真帳参照）が新築されここに引越した。私は院長室を当てがわれて院の経営を委されたのである」と記述されている。

松本忠徳元院長著「自叙傳」（以下、「自叙傳」）写真4は、「孤児院の経営状況については別に記録及び写真等もあるので、この伝記に省略す」とあるが、サイパン孤児院の記録は現在まで発見されていない。

「自叙傳」によれば、「保母及傭人の任免権を興えること。孤児院を新築すること」を入職の条件として提示し、いずれも認められ、新孤児院では院長に就任したのである。

その後の孤児院は半年余りで大きく変容する。「特別に用意した食事を与えるなど、十分に配慮をした結果、奇跡が起こった。1944年クリスマスまでに、孤児院の子供達は見違えるほどよくなった」〔沖縄県文化振興会公文書管理部資料編纂室編（2004）、p.67〕ことが写真からも見て取れる。さらに45年4月に撮られた写真では「孤児院の子供達は他の子供達に負けないうらい元気である」〔沖縄県文化振興会公文書管理部資料編纂室編（2004）、p.67〕と説明されている（米軍が公表する写真等は自国への宣伝に役立つものをセレクトしていることも意識してみなければならない。また穿った見方をすると、米軍の援助でいかに改善されたのかを宣伝することに利用されたという政治的文脈で読み取ることもできよう）。

サイパン孤児院では、松本忠徳院長を「お父さん」と呼び、食事や繕いをして世話する人たちを「お姉さん」と呼んでいた。週に1～2回は海水浴に行き、これも子どもたちの健康にとっては大きな意味を持っていたと思われる。子どもたちはどんぐりマークの旗を先頭に、「どんぐりころころ」の歌を繰り返しながら農園や海水浴に行くときに歌っていたという暮らしがあった〔佐々木（2001）、p.89〕。



史料提供) 松本忠司氏所蔵

写真4 松本忠徳氏の自叙伝

2) サイパン孤児院の運営と成果

孤児院の運営は、小さい幼児はバラ組、女の子は菊組、男の子は竹組と高学年は松組と4つのグループに分けられていた。孤児院の児童数は、137名であり、本土出身者が33名、沖縄出身者が104名（全児童の76%）となっていた。担当する職員は16名で、院長と保母（世話係）と炊事係の職員であった。松本院長も院内で生活をしていた。

建物は、図3 [佐々木(2001), p.90] のように、講堂・食堂を中心に、コンセットが十字型に並べられてあった。コンセットの長さは約20メートルで、子どもたちや職員の宿舎となっていた。コンセット内は、中通路の両脇にベッドを並べるようになっており、軍隊で使用していた宿舎システムである。

新・孤児院になってからは、特別に栄養剤や食料もまた衣類なども優先的に配給された。ミルクの配給も孤児院だけにあった。医者も病院から健康診断のために訪問していた。米軍の大きな救済支援策が功を奏したことは明らかである。

沖縄本島への帰還が始まる直前の1946年1月26日に米軍の日本人収容所司令官より、以下の文書が発行されている。

孤児院 松本忠徳殿

日本人キャンプ司令官

J. W. BANNON JR.

1. 前以テ指示サレタル如ク、日本人キャンプ孤児院ハ1946年1月30日第1次沖縄縣人送還ニ際シ閉鎖サルルモノナリ。

コレ多クノ未ダサイパン待機中ノ家族ニヨリ多クノ孤児ガ引取ラルルヲ得タルニ依ルモノナリ

2. 貴下ノ孤児院経営ハ卓越セルモノアリタリ
3. 貴下ハ本覚書ヲ保持シ将来必要ヲ生ジタル場合ノ推薦状タラシメンコトヲ提言ス

「貴下ノ孤児院経営ハ卓越セルモノアリタリ」と米軍からも高く評価をされており、新旧の孤児院のちがいは占領軍の視点からしても明確である。



写真提供) 松本忠司氏より提供。確認できる人数は、子ども99名、職員10名である。

写真5 新孤児院（サイパン孤児院）での全員写真 最前列中央が松本忠徳院長



写真提供) 松本忠司氏より提供

写真6 サイパン孤児院の院長室での子どもたちとのひとコマ



写真提供) 松本忠司氏より提供。この写真はこれまで発見されてなかったものである。

写真7 新孤児院の食堂でのおやつ時間と思われる

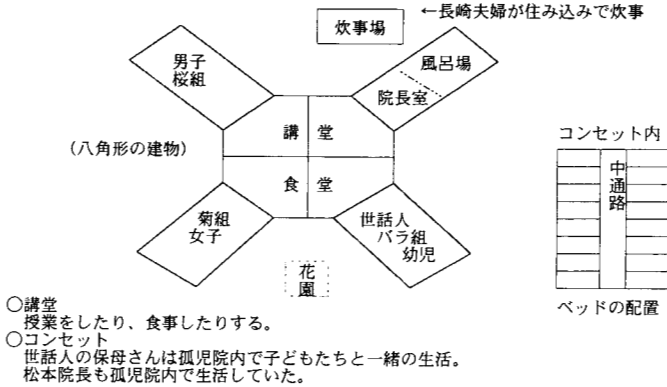


写真提供) 松本忠司氏より提供。この写真はこれまで発見されてなかったものである。

写真8 サイパン孤児院内の講堂での学校授業の風景と思われる

新孤児院の見取り図

- 建物は講堂を中心にしてコンセットが十字型に並べられた。
- コンセットの長さは20mくらいで、子どもたちや職員の宿舎になっていた。
- 講堂は授業をしたり、食堂として使っていた。
- 孤児院の職員は世話人を合わせて17名、炊事は長崎四郎夫婦と玉城栄三。そのうち沖縄出身の職員は松本院長(故)、嶋峯一・藤子、又吉タケ(故)、宮城菊江、高良富子・緒喜田ユキ・国吉光子、玉城栄三。



- 講堂
授業をしたり、食事したりする。
- コンセット
世話人の保母さんは孤児院内で子どもたちと一緒に生活。
松本院長も孤児院内で生活していた。

出所) [佐々木 (2001), p.88]

図3 サイパン孤児院 (新孤児院) 見取り図とコンセット内の配置

3. サイパンでの孤児院運営の実験からわかること

ススペ孤児院 (旧孤児院) からサイパン孤児院 (新孤児院) の流れを簡条書き的に整理すれば、以下の通りである。

- 1944年 7月 5日 ススペ孤児院 (旧孤児院) 開設 (松本忠徳の自叙伝によれば、7月5日に米海軍が開設と記述)。院長は、海軍軍医中佐クラーク・ガース
- 7月 栄養・衛生状況が悪く孤児の死亡も少なくなかった (実数は不明)
- 12月 子どもの健康状態が大きく改善された (松本忠徳氏が副院長格で入職したことが大きく影響)
- 1945年 5月 孤児80人 (戦中・戦後と孤児は400人いたが、320人は日本人の里親に引き取られた)
引き取られるといっても、収容所内のテントに移動するということであった [宮城美千代 (2003) 『創立20周年 サイパン会誌』, p.35]。
- 1945年 6月 6日 サイパン孤児院 (新孤児院) が開設され移転。ススペ孤児院の開設期間は11か月
- 1946年 1月 26日 日本人収容所司令官 (J. W. BANNON JR) より松本忠徳院長に通知
「日本人キャンプ孤児院は1946年1月30日第1次沖縄県人送還に際し閉鎖されるものなり」
サイパン孤児院の開設期間は8か月
- 1月 28日 引き揚げが決まり、親戚などがいる子どもは収容所内で引き渡し、残った

沖縄出身の子どもたちは松本院長が沖縄に連れ帰った

1月30日 引取人のいない孤児を連れて、サイパン島を引き揚げ、沖縄へ

2月4日 久場崎に着き、インヌミヤードゥイ(普天間の高原の丘の上)に2か月滞在。
身寄りが引き取りに来るまで滞在。引き取り手のない子どもは沖縄の孤児院に移動

その後、松本院長は一人の子どもを連れて、座間味島に引き揚げる

沖縄諮詢会会議録には(1946年2月11日、諮詢会協議会)、農業、工務、社会事業、教育に関する調査の件で議論された中に、志喜屋孝信委員長が「サイパンから来られた松本忠徳氏のお話をお聞きますか否や」と聞き、全委員が「聞きます」と確認されている[『沖縄県史料 戦後1 沖縄諮詢会記録』(1986)、p.289]。

聴き取りがされたかどうかは不明であったが、サイパン孤児院の院長であった松本忠徳氏の自叙伝では、沖縄本島に帰ってから郷里に帰るまでの2か月の間に「志喜屋委員長の訪問もあり、諮詢会でサイパン戦及戦後の状況について講演す」と記述されており、聴き取りがあったことを確認できる。

孤児院の運営と食料配布に関する手立てを聴くことがテーマになっていたのだが、それは一定の改善が行われたことが教訓として聴き取るべき課題となったとみることができよう。ただし諮詢会での聴き取りで、孤児院運営の改善について語られたのかどうかは定かではない。この沖縄諮詢会による聴き取り=松本氏の「講演」がサイパンの新旧孤児院での実験が沖縄戦後の孤児院施策に活かす最大のチャンスであったが、ほとんど活かされた形跡はないと言わざるを得ない。

その後、一人の子ども(孤児)を連れて座間味島に移り住んだのである。帰島後、さまざまな役職に着き、座間味島の発展に多大な寄与をしているが、1948年3月1日には、戦後初代民選村長として座間味村長に就任し、1954年9月までの2期を勤めている[『座間味村史 [上巻] 自然・歴史・産業』(1989)、pp.408-414]。

サイパンにおける孤児院運営の改善が具体化された要因は、①米軍の援助によって医療や衛生面も大きく改善されたこと(サイパン孤児院は軍病院、医療所のすぐ横に設置されている)、②松本院長の指導のもと炊事係の長崎一郎夫婦、世話係の保母たち、職員の努力が処遇内容に大きく影響したこと、③子どもの健康を守ることができる新孤児院の建設が行われたことであり、④食料を孤児院で開墾した農場で確保できるようになったことなどをあげることができる。

こうした変化はたまたまではなく、組織的に改善をしてきた結果である。つまりススペ孤児院での初期の子どものネグレクト死がまん延していた状況から、旧孤児院における約半年間での大きな変化と新孤児院での8か月という短期間での変化は、上記の養育する基本条件が整備されれば子どものいのちを守り、健康的な暮らしを保障することができることを結果としては実験したことになる。

繰り返して述べてきたように、サイパンは沖縄占領の実験場であった。「米国はサイパン攻略を通じて、民間人の存在する敵領土を軍事力で占領し、政策をどう実施していくかを学んだ」[ウイ

リアム H. スチュアート (1994), p.17] のである。「戦闘の間危機に瀕した民間人は、戦闘終了後も非常事態が布告されている期間は施設に収容され、以後の騒乱で危険な目に遭うことのないように取り扱われ」ることを基本に、「施設に収容され組織された民間人には、衣食住及び薬品などの生活必需品」の支給、学校の開設、収容所内の「一つの小屋に20人から50人」を詰め込み、「食糧不足を補う野菜作り作業」、仮設の神社の造成、神道の儀式を執り行う、戦災孤児への対応などが具体的な実験として行なわれたのである [ウィリアム H. スチュアート (1994), p.17]。

こうしたサイパンでの実験的施策の成果を活かして、沖縄での孤児院開設にともなう条件整備をしていれば、子どものいのちと健康は守られたはずである。しかし沖縄戦終了後の本島での孤児院で多くの子どもたちが死亡したことは事実である。

この事実は米占領軍が孤児院運営においていのちを守ることを前提にした施策をとろうとしなかった結果である。きわめて短期間で孤児院の子どもたちの健康を取り戻したことは、いわば“サイパンでの実験”であった。同じことは、心理情報戦においても「沖縄戦の宣伝ビラは基本的にサイパン戦の延長戦で考えられた」[土屋 (2011), p.13] といわれており、サイパンはこの面でも実験場となっていたといえることができる。

沖縄戦後の孤児院での子どもたちの多くの死は、サイパンの実験の結果でわかっていることを実行しなかった、いわば戦争によるネグレクト死であると言わざるを得ない。多くの子どもたちが孤児院で死亡する現実に対して、戦闘が終結した以降であれば、適切な食糧や医療・衛生の保障ができたはずである。サイパン島での新旧孤児院の変遷は沖縄戦中・戦後の孤児院政策に関する大いなる参考事例を提示していたはずである。にもかかわらずそうした努力を怠ったのは、結局は占領者の視線で子どもへの施策もまた行われていたということである。

戦後、孤児院時代から沖縄支配は一貫して占領者の視線で貫かれていたと言えるのではなかろうか。ジャーナリストの七尾和晃は『沖縄戦と民間収容所』のなかで「沖縄の住民にとっての『捕虜』生活が、米軍にとっての『保護』という強い信念と建前を孕んでいたことは、しかし今に至るまで……収容所生活の体験者たちにとっては意識されていない。それは、半世紀を超えてなお続く、沖縄における米軍駐留の在り方の、微かにして、だが決して噛み合わぬ悲劇の芽生えであったかもしれなかった」[七尾 (2010), p.10] と書いている。サイパン孤児院での経験を生かしていれば、占領支配とともに「米軍にとっての保護」という両面からの評価も可能であったが、沖縄本島においても孤児院の状況はネグレクト死さえ防げなかった実態がある。無差別攻撃に戦争を生き抜いた子どもたちを1945年6月以降、死に追いやめることは極力防げたはずであるが、そうした努力がされたとは言い難い。孤児院の子どもたちは、親の死と直面し、子どもとして生き成長していく権利が保障されなかったという点で、沖縄戦の二重の犠牲者であった。そして私たちが想像だにできなかった人生を孤児たちが歩むことになったことは、戦後沖縄の空白の歴史となっている。

まとめにかえて—34年ぶりの再会、サイパン孤児の集い—

戦後34年をすぎた1980年1月27日、サイパン島で親を亡くした当時の孤児たちが那覇市内のホテルに集い34年ぶりの再会を果たしたことがラジオ沖縄(2月3日午後8時~8時20分)で放送された。その放送内容がほぼそのまま郷土誌『青い海』(1980年12月号)に掲載されている。

その一コマに、八重山から両親が駆けつけ、娘であることを確かめ合った状況が語られている。

「私、こんなして頭をさわったり、どこをさわったりしても、私が抱いて育てた子供のような、手も足も出して合わせてみたさーね。そして親子のつながりというのはこんなものかねって思って、わたしすぐ抱きしめてね。—なんとも言えない……。三〇何年か本当に苦労しただろうと思ってね。私あなたをわざわざ捨てたんじゃない、戦争だから、戦争を恨みなさいよ。親を恨んではいけないよと言ってね。私言ったさ。そしたら私に抱きすがって、赤ちゃんのように、赤ちゃんのように抱いてくれて、赤ちゃんと思って自分を抱いてくれて、そう言うんだよ。赤ちゃんのときに別れ別れになったんだから、赤ちゃんのときに離れたんだから、赤ちゃんのように抱くよね—って言ってね、そうして一晩を明かしたんです……」〔『青い海』(1980.12), p.127〕。

どんな思いをしながら、孤児たちは生きてきたのであろうか。

アナウンサーは言う。「去る大戦は筋書きのない悲劇のドラマを数多く否応なしにつくり上げた。サイパン孤児もその典型のひとつです。戦争の恐ろしさを改めて思い知らされるドラマが、この人達の心のなかから消え風化することが、いつの日かあるのでしょうか」。

このラジオ放送を掲載した雑誌発行から30年以上が過ぎ去っている。私が聴き取りをしたなかで、沖縄厚生園(沖縄県の統合された児童養護施設)で少年期を暮らした方は、「あの時の記憶をコンクリートに固めて、海の底に投げ捨てたいと思って生きてきた」が、つい最近、職員だったM先生に会って、その気持ちが少し変わったと言われていた。私には推し量ることのできない心情であるが、事実を掘り起し、記憶のなかに埋没させてはならない史実を整理していく努力はできている。でも当事者の記憶のなかから忘却したい事実も少なくないであろう。歴史研究は、当事者のこうした心情を前にして、どう行動すべきであろうか。

孤児院という空間での暮らしは、そこに生きた子どもたちにとってどのような体験と記憶を残してきたのであろうか。あらためて時間的にも史料的にも限界のある研究テーマではあるがまとめてみたいと思っている。

謝辞

松本忠徳・サイパン孤児院院長の長男でおられる松本忠司氏より貴重な史料提供と聴き取りをさせていただきましたこと、心より感謝申し上げます。ご家族の方には史料作成に協力していただくなど、本当に感謝あるのみです。勝手な印象ですが、忠徳氏のお人柄を忠司様はじめご息のみなさまから感じることができました。記して感謝申し上げます。

引用文献

- 末吉重人 (2004) 『近世・近代沖縄の社会事業史』 榕樹書林。
- 石原昌家 (1986) 『郷友会社会—都市のなかのムラ—』 ひるぎ社。郷友会とは、「同じ故郷を持つ人の親睦組織。戦前は移民や本土出稼ぎの人たちで結成。戦後は人口の都市集中で、多くの郷友会ができた。強い結束力を持ち、政治、経済の面で影響力を持つ」(琉球新報社編 (2003) 『【最新版】沖縄コンパクト辞典』 同, p.143)。
- 上原正稔訳編 (1986), 『沖縄戦 アメリカ軍戦時記録』 三一書房。
- 仲宗根源和 (1986) 『沖縄から琉球へ』 月刊沖縄社。
- 仲地博 (2001) 「戦後沖縄自治制度史 (一)」 『琉大法学』 第65号。
- 児童福祉法制定50周年記念 『戦後沖縄児童福祉史』 (1998) 沖縄県生活福祉部。
- 鳥山淳 (2013) 『沖縄／基地社会の期限と相克 1945-1956』 勁草書房。
- 浅井春夫 (2013) 「沖縄戦と孤児院」 『立教大学コミュニティ福祉学部紀要』。
- 沖縄大百科事典刊行事務局編 (1983) 『沖縄大百科事典 (中巻)』 沖縄タイムス社。
- 近現代史編纂会編 (2011) 『サイパンの戦い』 山川出版社。
- 陸戦史研究普及会編 (1968) 『陸戦史集 9 沖縄作戦 (第二次世界大戦史)』 原書房。
- 石原昌家 (1989) 「VI 沖縄戦」 藤原彰・今井清一編 『十五年戦争史 3 太平洋戦争』 青木書店。
- 防衛庁防衛研修所戦史室編 (1968) 『戦史叢書・沖縄方面陸軍作戦』 朝雲新聞社。
- 玉木真哲 (2011) 『沖縄戦史研究序説』 榕樹書林。
- 沖縄県文化振興会公文書管理部資料編纂室編 (2004) 『沖縄県史 資料編 18 キャンプススッペ (和訳編) 現代 3 サイパンにおける軍政府の作戦の写真記録』 沖縄県教育委員会。
- 野村進 (2005) 『日本領サイパン島の一万日』 岩波書店。
- 井波妙子 (2000) 「サイパン島スッペ収容所について」 『具志川市史だより』 第15号。
- サイパン会誌編集委員会 (2003) 『創立20周年 サイパン会誌』 サイパン会。
- 佐藤多津 (1996) 『サイパンの戦火に生きて』 自費出版図書館。
- 宮城信昇 (2002) 『サイパンの戦いと少年』 新報出版。
- 佐々木末子 (2001) 「《調査ノート》サイパン孤児院—山田良子、嶋峯一・藤子夫妻の体験を通して—」 『具志川市史だより』 第16号, 具志川市史編さん室編集・発行。
- 竹前栄治・尾崎毅訳 『米国陸海軍 軍政/民事マニュアル (1943年12月22日)』 (1998), みすず書房。
- 高宮城トヨ (1993) 「サイパン島で身内との生き別れ」 『上勢頭誌 中巻 通史編 (II)』 旧字上勢頭郷友会。
- 沢舩安英 (1993) 「住民の『集団自決』の生き残り」 『上勢頭誌 中巻 通史編 (II)』 旧字上勢頭郷友会。
- 石弘之・石紀美子 (2013) 『鉄条網の歴史』 洋泉社。有刺鉄線による鉄条網の機能について「国境や原発をはじめ産業・公共・軍事など、さまざまな施設の境界に多用されているのは、物理的に侵入者を排除するというよりも、心理的に施設を隔離する機能が重視されたためだろう。心理的な障壁は高い政治性を示すようになった。外と内が政治的信条、思想、民族、宗教の相違で仕切られて、『敵』と『味方』という区分にもなり、『支配』と『従属』、『富者』と『貧者』という対立構造も加わってくる」という意味を持っている。
- 編集委員会編 (1989) 『座間味村史 [上巻] 自然・歴史・産業』, 座間味村役場。

- 編集委員会編(1989)『座間味村史 [下巻] 村民の戦争体験・資料編』座間味村役場。
- 歴史地図作家 ウィリアム H. スチュアート(1994)『サイパン燃ゆ』サイパン・アメリカ記念資料館。
- 土屋礼子(2011)「後対日情報政策の起点としてのサイパン心理戦」『Intelligence』No.11。
- 七尾和晃(2010)『沖縄戦と民間収容所』原書房。
- 『青い海』(1980.12) 青い海出版社。

参考文献

- 佐野真一(2013)『僕の島は戦場だった—封印された沖縄戦の記憶—』集英社インターナショナル。
- 大野俊(2001)『観光コースではないグアム・サイパン』高文研。
- 平塚征緒編(1981)『グアムの戦い—太平洋戦争写真史—』月刊沖縄社。
- サイパン会誌編集委員会編(1986)『サイパン会誌—思い出のサイパン—』サイパン会。
- サイパン会誌編集委員会編(1994)『サイパン会誌—心の故郷サイパン—』サイパン会。
- テニアン会記念誌編集委員会編(2001)『記念誌 はるかかなるテニアン』テニアン会。
- 下嶋哲朗(2012)『非業の生者たち』岩波書店。
- 奥村芳太郎(1970)『外地に残る日本の戦歴 [南方編]』毎日新聞社。
- サンパン島を含めた南洋諸島「南洋群島・日本関係略年表(明治から終戦まで)」
(矢内原忠雄文庫南洋群島関係資料展 <http://manwe.lib.u-ryukyu.ac.jp/library/digia/tenji/yanai/h7300.html>)。